

# 不安定に耐える力を養うこと

—教育計画における柔軟性の必要について—



津 守 真

われわれの住む世界は、未知のことにみちている。おとなも、子どもも、すべての人が未知の世界にぶつかり、予期しないうきことに対処して、それぞれに応じて建設的に道を切り開いてゆかねばならない。それには、すでに分ったやり方だけに頼っていることではできないし、すみからすみまで用意され、お臆立てをされた道の上を歩いていたのでは、予期しないうきことに対処する態度は養われないのである。将来に向けて開かれた世界には、きまったレールはない。新しい方向に、今までにないものをつくってゆくのが、将来に向って歩んでゆく人間に課せられる課題である。もちろん、それは、全く新しいものではない。むしろ、客観的には、旧いものが九〇パーセントであるかもしれない。しかし、その人の世界の中で、

新しく遭遇した要素を自分で消化して、一步を進めるならば、それは新しい発展なのである。私どもは、年少者の教育において、この未知の不安定なものに対処する態度を養うことを、ひとつの重要な課題として考えてゆかねばならないと思う。私どもの世界は、われわれの好むと否とにかかわらず、個人を不安定にする要素は増加している。幼少時の教育から、このような基本的な問題を考えることによつて、個人が精神的に破綻することを予防することができるし、社会の問題の建設的な解決に役立つことができると思ふ。これはたいへん大きな課題であつて、多くの問題がふくまれている。ここでは、教育計画の問題に沿つて、その中のひとつの問題にふれたいと思ふ。

## 不安定な状態に耐えるということ

子どもは、何か、はつきりとわかりきって考えなければ気がすまないという傾向をもっている。善玉と悪玉とはつきり分けて、善人は何もかもよいし、悪人は何もかも悪いと考える。それは人間心理として、当然のメカニズムでもある。しかし、善人のすることは何もかもよく悪人のすることは何もかも悪いというのは事実ではない。

将来のことについても、はつきりときめてかからなければ気がすまない傾向を人間はもっている。しかし予め何もかもわかってしまうというならば、それは事実ではない。分らないままで進まなければならぬ。分らないと不安だから、むりに、あるやり方をきめて固執してしまうと、まちがいを犯すことになる。分らないままの状態に耐えることができるということが必要なのである。教育の営みは、人間形成の過程に関連することであるから、わりきれない要素をたくさんはらみながら、進まなければならないのである。

## 子どもの世界

教育の対象である子ども自身のぶつかる日々は、未知の世界である。たとえ、おとなにとってはわかりきったことでも、子どもにとってははじめての経験である。おとなは熟知している幼稚園の職員

室や倉庫も、新入の子どもにとっては未知の世界である。おとなは当然と思っていることがら、たとえば手を洗うときに水道の栓を順番に使うというようなことも、子どもには未知の世界のことに属する。順番に手を洗うというおとなの常識は、子どもに直ちに通用しない。ここでも、順番を守る子はよい子で、順番を守れない子は悪い子だというような、おとなのわりきった考え方は、子どもが真の規律を学んでゆくのに役立たない。先生がそばにいるときには順番が守れるが、そうでないときには守れないというのは、本当に順番が分っているとは言えない。自分が早く使いたいあまりにわりこんでいって、友だちから非難されたり、かえって混乱して手間どったり、そのような経験をつむうちに、子どもは順番を学んでゆく。子どもは、こんなことにも時間をかけて学ばなければならないのである。あるいはまた、子どもが自分が大切にしていた紙を、誰かがひき出しから出して切り刻んでしまった。これはその子にとっては、とても許せないことである。そこで、相手をなぐって泣かせては、この場合も、ただ、仲よくしましょうというだけでは、解決にならない。こういうことの解決には、多くの体験と、この子どもの体験を理解して指導してくれる親や先生の助けが必要で、実に時間がかかるのである。このような体験を経て、子どもは発達してゆく。

子どもが未知の世界でぶつかるいろいろの問題を、子ども自身が自分の体験として解決してゆくことによって、子どもは未知の問題を解決する態度を学ぶであろう。教育は多くのなまの体験をするだけの時間を、子どもに与えなければならない。

子どもが、これから次第におとなになってぶつかる世界は、現在のおとなにも予想のできない未知の世界である。文化人類学者のマーガレット・ミードは、かつて、一九二〇年代にニューギニアの原始民族の研究に行き、それから三〇年後の一九五〇年代に、再び同じ民族について研究を行なった。その結果、彼女は、三〇年間における、原始社会の社会的変化に驚いた。そして、「誰も、自分が生れてきた世界と同じ世界の中で生涯を過ごすことはできない。誰も、その人の働きがかりに仕事をしていた同じ世界の中で死ぬことはできない」という名句を残している。現代はとくに変化の世界であるから、どんなに現在と違った社会に変化しても、子どもがそこで新しい問題にぶつかって解決できるような態度を養っておく必要がある。現在において、自分で問題を解決することを学ぶことのできる場を備えることこそ、重要であろう。

## 教師自身

教師のおかれている場も、未知の要素が数多くある。それは、未

知の中にある子どもを対象として扱っていることからくる必然でもある。教師の仕事というのは、流れ作業の仕事台の前に立つ工員の仕事とは、全く異った仕事である。表むきには、教師のノートには年間計画があり、一月の予定があつて、はっきりわかつたようにみえるが、内面はそうではない。子どもが何を言い出すかわからない、何をやり始めるかわからない。子どもがどういふ問題で困惑し、混乱を感じるかわからない。予想のつくことがらもあるが、予想のつかない要因がたくさんあるのだ。教師は、多くの未知の不安定に直面して、予期しなかつた要素を心の中に包含してゆくことのできる広い度量を必要としている。

まず、個人差に関して――

子どもは、たとえ同じ年令、同じ能力であつても、子どもの感じ方、問題となることからは、それぞれ違っている。まして、一つのクラスには、生れ月も、能力も違う子どもが三〇人も四〇人もいるのである。このことは、すべて個人別に指導せねばならぬというのではない。多くの個人差を包含できるような教材と、教材の与え方と、教育計画がなければならぬことである。たとえば、紙細工で何かをつくる場合にも、一種類のものを、同じ指示に従つて同時に作るというのでは、個人差に適應した指導を行なうことはできない。その個人の問題と感ずることにこたえることもできない。ど

んな能力のどんな個人でも、その腕の中に包容できるような、教師自身の児童観が必要である。

全体がどのように進行するかということに関して――

それは、教師の予想しない思いがけない方向に進むことがしばしばである。そのときに、思いがけない進展をうけとめてゆく度量が必要である。自分の気にそわない方向に進んだからと言って、気持ちを損じないように。その際に生ずる内心の混乱と不安を建設的に処理してゆく能力を、幼いときから発達させておかねばならない。

教師自身、一個の人間として、不安定な将来に向って、どのような態度をもって当るかということはさらに根本的な問題であり、教師としての営みと深い関係がある。人生の問題について、確実にやり頼むべきものを持っている教師は、その芯において強い。

### 教育計画

不安定な事態に対処する態度として、一応の形式をととのえて、それに固執するような防衛体制がある。それは、真実の問題を見えなくしてしまう。われわれは、混乱として認め、教師並びに子どもの不安はそれとして認め、また、自分の失敗をも失敗として卒直に認める態度を必要とする。形式は変更可能なものとしてとらえるべきである。

教育現場は、ひとつの芸術作品のようなものである。その作者には、当初からイメージがあるのが当然である。このイメージが固定して、最初からこまかいところまできまったものである場合は、一方的なものになってしまう。建築のような芸術では、予め綿密に作られた設計図を実現してゆく。絵画や彫刻では、最初漠然と湧き起ったイメージが、素材の上に実現されるに従って、次第に明確になってゆく。教育現場の扱う素材は、予想外の要素を多く含む子どもである。だから、最初から、子どもの活動について、イメージをもつことの困難さが強調されて、子どもの発展する状態に即して、その活動を発展させるような助言にのみ終始してゆくという考えも出てくる。しかし、そこには、やはり、未知の発展という、ひとつのイメージがあるのだと思う。

子どもの一連の活動の、あるでき上りを予想する場合には、それは、多くの要素を包括できるようなものでなければならぬ。それが、子どもの生活と一致しないとむりが出てくるが、あるいは、先生のひとりよがりになってしまう。

いずれにせよ、教師の側には、子どもの中に具体的に実現すべき、あるイメージがある。そのイメージは、背景になる知識と、現実の子どもの姿と、それから、教師の洞察から生れてくる。その現実、子どもと教師の共同制作である。子どもにも、幼稚園で

何かをしようという意気込みと、そこでの生活のイメージがある。

多くの力がそこに織りなされて、教師のイメージがそれらのすべてを包含できると、それはすばらしい芸術作品になる。そういう保育にゆきあうと、たいへん楽しい。芸術作品としての教育現場は、形として後に残すのが困難だから、人目につきにくい。しかし人知れずして咲く花が、きつと日本の各地にあることと思う。

教師によってひかれたレールの上を子どもが走るのではなく、子どもが毎日の問題ととりくみながら、未知の世界に向かって歩みを進めてゆく、その歩みを支えるものが、教師の教育計画である。

#### 実際にそこで問題にすべきことは何か

・はさみで形のとおり切れない幼児は、形の中を切り刻んでしまう。それをくりかえしている中に、ある時期になると形を切れるようになる。

・こんなものを作ろうと、子ども自身、あるイメージをもって、それをいろいろと考えながら実現してゆく。子どもはそのような考えにとりつかれると、夢中になって没頭する。

・友だちとつみきを争って、自分だけが使おうとすると、混乱を起す、などなど。

いくらでも例をあげてゆくことが可能な、こういうことを学んで

ゆくのには、十分な時間と空間が必要である。子どもの未熟な状態に耐えてゆくことが、教師の側の態度として必要である。未熟な行動は、おとなにとっては、気になる行動である。しかし、気になるから、口やかましく言い、約束やきまりをつくるというのは、本当の解決にならない。困ったら、すぐに解決してしまえというのはなくて、困ったままで、がまんして、真の解決を待つという構えが、教育には必要なのだと思う。子どもが自分で学んでゆくのには、ゆくりと時間をかけなければ、教育目標として、よいことを書き並べても、それは子どもと無縁のものになってしまう。現在の多くの幼稚園では、もう少し時間を与えれば、子ども自身で解決できるのにと思うところで、活動をストップして他のことに移ってしまう。だから、子どもも、その気になって自分を発揮して活動しない。そこでは子どもはおとなまかせである。

教師は子ども自身がつかっている問題は何であるかを洞察する観察眼を必要とし、その問題の解決に役立ってゆかねばならないのである。

× × ×

× × ×